学校教育目標　「ひと」とともに生きる生徒の育成

植竹の息吹き

「自律」「敬愛」「進取」の気概溢れる我らが学び舎
チーム植竹の創造

令和八年
神無月
第6号

さいたま市立植竹中学校
さいたま市北区土呂町３５２
〒 331-0804
TEL　048-663-2115
FAX　048-665-6377

足跡（そくせき）

校長　　玉崎　芳行

秋の休日、珍しく書庫の片付けに時間を割いた。西の空が微かに茜色に染まりかけたので、そろそろ終いにしようかと、机の一番下の引き出しを開け、奥で眠っていたノートの塊りを引っ張り出した。

偶然だったのか、必然だったのか、“若かりし頃“　学生時代の日記に出くわしてしまった。ページを開こうか開くまいか躊躇（ちゅうちょ）した。青くさい、独り善がりな言の葉を、乱れに乱れ書きなぐったことだけは、うっすらと記憶の片隅に残っている。あの頃のむき出しの自分と向き合うには、いささか抵抗があった。それでも、自嘲的な笑いを浮かべながら、中学時代のページを開いてみた。顔が赤くなった。ちょっぴり心臓が高鳴った。綴られた言の葉は、その当時の自分を示す。

「“ 絶対“ なんて、絶対ない！」「朝の訪れぬ夜はないんだ。必ず夜明けは来る！今は、耐えろ」「やっぱりオレには無理なのかなぁ…」「どうせオレなんて…」「いいのか、このままで？」

あの頃は、何を思い、何を考え、何を支えに学校に通っていたのだろう。今となっては、はっきりと思い出せない。ただ、何らかの目標に向かい、がむしゃらに突き進もうとするエネルギーがあったり、友達の何気ない一言に傷ついたり励まされたり、周りからの助言に素直に耳を傾けず意地を張り続けたりしていた。そんな自分がいたことだけは、確かだったようだ。

どうしても、何としても行きたい学校があった。生徒会役員として、責任を果たそうとしていた。学校行事に熱くなっていた。先生によく叱られていた。最後まで、告白できなかった女の子がいた。

意志在る処に道は拓かれることを知った。誰かのために汗をかくことの尊さを知った。人の気持ちは、時としてどうにもならないことを思い知った。本当の友だちのありがたみを知った。

さて、我らがチーム植竹。１、２年生は新人戦が始まった。３年生は第１回学力検査を終えた。
今、あなたは、どんな自分と向き合っているのだろう。今のあなたが、明日のあなたを創る。今の
その一歩が、あなたの人生の足跡となる。あなたには、良き足跡を刻んでほしい。;